

4月 27日(月曜日)「ダビデ(18) 詩人として」

【新改訳 2017】

II サムエル記23・1-7

「これはダビデの最後のことばである。……『義をもって人を治める者……は、太陽の登る朝の光、雲一つない光の朝のようだ。……』まことにわが家は、このように神とともにある。……」(1-5節)

当時、信仰的偉人の最後のことばは、一種の預言と考えられたと言われます。ダビデのことばも、そのように受け取られたのでしょうか。

ここでは、このことばが詩的表現であることに注目したいのです。

これまで見てきたように、ダビデの生涯は波乱万丈の生涯でした。しかし、彼はサウル王の追撃を逃れた時も、その心境を詩に表現し(22章参照) 不倫の罪を犯した時にはその苦悶と悲しみ、悔い改め、ゆるしの感謝を詩に歌い(詩篇32, 51篇参照) 息子の反乱で都落ちした時にも、詩を作っています。(同3篇参照)

このような詩のこころは、神への信仰の心とあいまって自らを助け、また数えきれないほど多くの人々の助けともなっているのです。

～祈り～

主よ。あまりにもストレスの多い時代に、信仰者が、信仰によって真に心

のゆとりをもち、人々に慰めを分かち与えることができますように、祝福してください。

【学びのために】

心にゆとりをもつことは、たいへん大切なことです。一般には、趣味をもつことが大きく貢献すると考えられています。しかし信仰者は、全知全能、全き義にして愛なる神を信じる信仰から生じるゆとりをもつことができるようになりたいものです。